

# わが街 ザ・ドクター

◀1面より続く

## がん化するポリープを 早期発見することが大事

「便秘や下痢などの便通異常、血便(便に血液が混ざる)、腹痛などの自覚症状はまったくないけれど、大腸内視鏡検査の結果、ポリープが見つかることがある」と話す小原医師のクリニックでは、一日に2〜3件の大腸内視鏡検査を行う。なかにはポリープが10個以上も見つかる患者さんもいるそうだが、数よりも重要なことは、発見したポリープが「がん化」するタイプのものかどうか、ということ。一般に「ポリープは、がんではないから心配ない」と思う人も少なくないようだが、これは大きな誤解だ。

「ポリープは、がんにならない非腫瘍性タイプと、がん化する腺腫タイプとに分けられます。最近の内視鏡カメラは精度がよいので、発見した大腸粘膜の隆起がポリープなのか、それともがんなのか、また、がん化するタイプで治療が必要なポリープなのかどうかも大体わかります。

早期がんやポリープが見つかった場合、大きさが1センチ以下であれば、その場で摘出することも可能ですし、必要に応じてポリープの細胞を顕微鏡で調べる検査(生検)を行い、その後の治療や再発予防に活かすようにしています」

がんによる死亡数をみると、男性の場合、大腸がんは第3位なのに対して、女性は乳がん



おばら消化器・肛門クリニック  
院長 小原邦彦

# わが街 ザ・ドクター

## 早期であれば約99%が 完治する大腸がん

国立がん研究センターは、2017年に新たにがんと診断される人は約101万人という予測を発表した。部位別で見ると、最も多いのは大腸で約15万人、次いで胃が約13万3000人、肺が約12万8000人、乳房(女性)が約8万9000人、前立腺(男性)が約8万6000人。

がんの初期は自覚症状がなく、気づいたときには手遅れになるケースもあるが、近年、医療が

んを抜いて第1位。早期に見・治療をすれば、ほぼ100%の人が完治するといわれるだけに、大腸検診を受ける意義は大きい。

「大腸がん検診を受けることで、大腸がんの死亡率は60〜80%低くなるのがわかっています。がん化するタイプのポリープを放置して、がんが大きく成長すれば大がかりな手術になるので体はもろくなり、日常生活の負担も大きくなります。

何も自覚症状がないから大丈夫と思わず、ぜひ検診を受けてほしいと思います」

## 検査に対する羞恥心や 苦痛をなくすために

そもそも大腸がんは欧米人に多く見られ、日本人には少なかった。現在では逆転し、米国では大腸がんの罹患率とともに死亡率が減少し続け、日本では増加し続けている。この差は何かというと、大腸がん検診の受診率の違いである。

米国がん協会では、2013年に58%だった大腸がん検診の受診率を高め、2018年までに80%にすれば、新たな大腸がんの発症数は17%、死亡率は19%まで減少し、2030年までには発症率は22%、死亡率は33%減少させることができる」と試算している。

これに対して日本では、大腸がん検診の対象者である40〜69歳の人の受診率は、男性で44・5%、女性で38・5%にとどまっている(厚生労働省/国民生活基礎調査2016年)。「血便や便通異常などの自覚症状がない場合、最初に便に混ざった少量の血液の有無

を調べる便潜血検査、いわゆる検便を行います。大腸がん検診の対象者のうち、便潜血検査を受けた人は3割弱にすぎません。

おばら消化器・肛門クリニック 院長  
小原邦彦

(おばら-くにひこ)  
1968年 東京都大田区矢口出身。1993年 日本医科大学医学部を卒業後、同大学第二外科入局、同大学付属第一病院勤務。95年 立正佼成会佼成病院外科、東急病院外科に勤務。97年 食道癌および大腸癌の遺伝子解析に関わる研究に携わる。2000年 平塚胃腸病院外科、02年 日本医科大学付属第二病院(現 武蔵小杉病院)消化器病センター、03年 社会保険中央総合病院(現 東京山手メディカルセンター)大腸肛門病センターを経て、2008年7月 おばら消化器・肛門クリニックを開設(旧小原医院承継)。日本医科大学付属武蔵小杉病院 消化器外科非常勤講師、医学博士。日本外科学会認定専門医、日本消化器外科学会認定専門医、日本消化器内視鏡学会認定専門医・指導医、日本大腸肛門病学会認定大腸肛門病専門医・指導医。日本臨床肛門病学会、内痔核治療法研究会、日本東洋医学会に所属。



日と当日に下剤を飲んで大腸内をきれいにした上で、肛門からカメラのついた内視鏡を入れる。検査は15〜20分。鎮静剤を使用するのでウトウトとしている間に終わる。

「肛門からの検査は恥ずかしいとか、大腸の検査は苦しくてつらいのでは…」という不安や緊張を抱えて来院される患者さんのために何ができるのか、と全力で考えています。

私自身、2年に1回、大腸内視鏡検査を受けていますが、大腸の異常を発見するためというよりも、検査を受ける患者さんの気持ちと共有したいという思いから。ラーメン屋さんと同業者同士で食べ比べするのと同じような感じですかね(笑)。いろいろな施設で検査を受け、より良い対応を見つけては、うちのクリニックに取り入れています」

胃・大腸の内視鏡検査はハードルが高いと考え躊躇する人が多いだけに、検査前の処置や内視鏡の挿入法など、あらゆる面で工夫を試みながら最善を尽くし「必要なら、もう一度検査を受けてもいい」と患者さんに思ってもらえたら最高」と笑う小原医師。心配なことがあれば、早めに相談するべきだ。

進歩し、早期発見・早期治療によって治る確率が高まっている。たとえば、罹患率トップの大腸がんの場合、5年生存率(がんと診断されてから5年後に生存している人の割合)は、ステージIで98・8%、IIでは91・3%、IIIでも82・1%と高い。「最終ステージIVになると18・5%と低くなることからわかるように、早く発見すればするほど治りやすいがんといえます。40歳を過ぎたら一度、大腸の検診を受けてほしい」と小原医師は語る。

▶3面に続く

### ●おばら消化器・肛門クリニック

〒146-0093 東京都大田区矢口 2-11-23  
TEL: 03-3750-8218 FAX: 03-3750-8245  
東急多摩川線 武蔵新田駅より徒歩8分

- 診療科目  
肛門外科、胃・大腸内視鏡内科、内科、小児科
- 診療時間  
月曜日～土曜日  
午前9:00～12:30、午後4:30～6:00
- 休日  
水曜、土曜午後、日曜、祝日、年末年始